慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	所有欲のドラマ : フローベール『感情教育』をめぐる一考察
Sub Title	Drame du désir de possession : essai sur l'Education sentimentale de Gustave Flaubert
Author	大鐘, 敦子(Ogane, Atsuko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.61, (1992. 3) ,p.156(99)- 175(80)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00610001-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

—所有欲のドラマ—フローベール『感情教育』をめぐる一考察

大鐘敦子

フローベールが1869年に脱稿したブルジョワの一青年フレデリックの物語『感情教育』では，その社会背景殊に1848年の二月革命及び51年のルイ＝ナポレオンのクーデタに関する歴史考証が厳密で徹底しているために歴史家の読書にも耐えうるというアギュロンの確言は，今では定説となっている。その事実をふまえて近年では主人公フレデリックの恋愛の物語と社会的・政治的文脈との関連を考察した研究が輩出した。[1] この二元論的な観点に立って今一度再読したとき，それは物語と背景を各所で繋ぎとめるという単なる技術をはるかにこえているように思われる。1864年10月の姪カロリーヌ宛の手紙の中でフローベールが「私は自分の世代の精神史を描きたいと思っている。（…）それは現在見られるような非生産的な情念の本だ。[2]」と告白しているのをみれば，この作品の出発点でのスケールの大きさが知れよう。だが作者のこの否定的歴史観は何に基づき，時代精神の非生産性とは何を意味していたのだろうか。

『感情教育』執筆中の書簡集を繙くと頻繁に目につくのは，ブルジョワへの限りない憎悪の念である。サルトルも指摘したように，ブルジョワ家庭で育ったにもかかわらずフローベールはこの嫌悪感ひいては厭世感を終生抱き続けたわけだが，主人公フレデリックを始めとして登場人物の多くがブルジョワジーに属するこの作品を描いていた時期，この人間の愚劣さ（la bêtise humaine）を凝視し掘り下げることはフローベールにとって過酷な作業であった。だが同時にその憎悪と蔑視ゆえに彼はブルジョワの特質を見抜く洞察力を養っていたといえるだろう。1866年姪カロリーヌ宛の

別の手紙の中でブルジョワは次のような印象で語られる。

> Ces bons bourgeois, qui ont nommé Isidore pour défendre l'ordre et la propriété, n'y cmprennent plus rien, et ils admirent M. Thiers qui a les idées d'un commis de M. de Choiseul!!![3]

「体制と所有権を擁護するためにナポレオンⅢ世を選任したお人好しのブルジョワたちは何もわかってはいないのだ!!!」とここでは批判されいるのだが，確かに体制派であるブルジョワたちが戦々恐々としていたのは，彼らの財産を失うこと，つまり現実には彼らの財産をこれまで守り続けた所有権を失うことだったのである。そしてまさに48年の二月革命ではブルジョワの生活基盤に深く関わったこの所有権とその矛盾が階級間の闘争を引き起こす一大要因になったことを忘れてはならない。物語の冒頭，フレデリックがセーヌ川を下ってパリからノジャンへ帰る場面から富裕な所有者になる夢が描かれる。

> Plus d'un, en apercevant ces coquettes résidences, si tranquilles, enviait d'en être le propriétaire, pour vivre là jusqu'à la fin de ses jours, avec un bon billard, une chaloupe, une femme ou quelque autre rêve. (48)[4]

多くの者たちが「立派なビリヤード台やボートや女或いは他の夢を抱いてあんな家の持ち主になれたら」と欲しているのだが19世紀フランス社会で独自の地位を確立していったブルジョワジーの権力と富への夢がここには象徴的に描かれている。フレデリックもこうした富や女性への所有欲に心をかき立てられた一人であるが，ここで見逃してならないのは彼らの所有欲においては「ビリヤード」などの富も「女性」も同一線上に何の違和感もなく併置されていることである。むろん所有欲とは生きていくうえでいかなる人間も決して逃れえない欲望ではあるが，所有権が主要な問題とし

て浮上した二月革命を作品の背景にしてフローベールは感情の根源に深く関わるこの所有欲をどのように描いているのだろうか。本稿では余りに基本的であるがゆえに曖昧になりがちなこの所有欲をめぐって若干の私見を述べることで，三人の女性を獲得したかにみえて結局成功しない主人公と成功したかにみえて流産した第二共和制の二つの失敗の物語を通じ，フローベールが伝えようとした時代精神に新たな照明をあててみたい。

『Frédéric の愛の変遷』

まず始めに，三人もの女性を追い求めいったんは手にしたようにみえながら，結局勝者とはなれずに終わる主人公フレデリックの恋愛遍歴のなかで，所有欲は如何に描かれているのだろうか。フレデリックもまた理想の獲得を目指したプチ・ブルジョワのひとりだが，彼は始めから先にみたようなブルジョワ的概念を持つ青年であった訳ではない。ノジャンへ帰る船の上で，一目見た瞬間からアルヌー夫人の虜になってしまったフレデリックにとって夫人への愛は単なる肉体的所有欲を越えたものとして始まった。

> Quels étaient son nom, sa demeure, sa vie, son passé? Il souhaitait connaître les meubles de sa chambre, toutes les robes qu'elle avait portées, les gens qu'elle fréquentait; et le désir de la possession physique même disparaissait sous une envie plus profonde, dans une curiosité douloureuse qui n'avait pas de limites. (51)

夫人の編み物籠を見ただけで，フレデリックはアルヌー夫人の生活の全てを知り尽くしたいという興味にかられ，ただ一心に夫人へ近づこうとする彼の愛はまず彼女がいる空間を独占しようという形をとってあらわれる—遠くから窓に映る彼女の影を見つめに通い，ようやく彼女の家の居候になって信頼を得ても，軽蔑されるのを恐れるあまり，愛を告白するには至らない。それどころかアルヌー夫人の訪問あるいは Créil の製陶工場訪問の際も常に二人の間には子供たちや召使い，セネカルなどの邪魔が入って，

フレデリックは夫人と二人きりになれる遠く見知らぬ国へ行くことさえ夢見ることになる。

> D'ailleurs,, les enfants, les deux bonnes, la disposition des pièces faisaient d'insurmontables obstacles. Donc, il résolut de la posséder à lui seul, et d'aller vivre ensemble bien loin, au fond d'une solitude; (231)

フレデリックが告白すべき空間さえ我が物とできないのは何もアルヌー夫人に限ったわけではない。ロザネットの仮面舞踏会で豪奢なパリ生活を垣間見たフレデリックは，それがもたらす女性や奢侈を渇望しロザネットを愛人にしようと企てるのだが，一緒に行った競馬でも各々の思惑をもつ友人たちに邪魔されて二人の時間は持てず，彼の肉欲への期待は裏切られてしまう。憤慨したフレデリックはもうロザネットに会わない決心をし，こういった女たちを所有するのに必要な金を獲得するために株取引で一儲けしようと企むが，相変わらず好きな女性を他の男たちと共有することは我慢できない。友人シジー子爵がロザネットを中傷した時も(car enfin... elle est à vendre!)「アルヌーはいいものを持っているじゃないか」(il a quelque chose de très bien : sa femme) と言われた時も一種過剰ともいえる反応を示してしまう。

フレデリックが生きているこのブルジョア社会では女性はまるで所有物 objet à posséder, つまり propriété として私物化されているのである。そしてそれを裏付けるかのように『感情教育』の中では女性も物も曖昧なままにコノテーションが伝達されていく。例えばロザネットがフレデリックの愛人であるとと信じ込んでいる画家ペルランは，彼にロザネットの肖像画の代金を支払わせようと次のような言葉を添えて画商のショーウィンドーに絵を展示する。

> On regardait un portrait de femme, avec cette ligne écrite au bas

en lettres noires《Mlle Rose-Annette Bron, appartenant à M. Frédéric Moreau, de Nogent. (299)

こんな風に記載されては，フレデリックが所有しているのはこの肖像画だけではなく当のロザネットであることは明白である。つまり Frédéric＜Rosanette＜potrait という図式が成立しているのである。ペルランはロザネットも絵もフレデリックの所有物として均等化してしまうのだ。同様に，家を売却してまで手形の支払い請求に応じようとするアルヌー夫人のため，フレデリックが延期を申し出たことを回想してダンブルーズ夫人は言う。

— 《En effet, vous êtes venu, un matin...pour...une maison, je crois? oui, une maison appartenant à sa femme.》(Cela signifiait: 《C'est votre maîtressse.》) (303)

アルヌー夫人がフレデリックの愛人であると憶測する夫人にとっては「アルヌー夫人が所有する家はフレデリックのものも同然だ。」 (Frédéric＜Mme Arnoux＜maison) という図式がいとも簡単に出来上がってしまうのである。こうしたブルジョワ社会に共通する通念はフレデリックの気にそぐわない。だが愛する女性との共通の空間を見出すのに悪戦苦闘したフレデリックにもようやくチャンスはめぐってくる。子供たちは学校へ行き，アルヌーはパレ・ロワイヤルで長い昼食をとっていて誰にも邪魔されずアルヌー夫人とただ二人でいるときフレデックはなんと幸福だろう。

L'assurance de son amour le délectait comme un avant-goût de la possession, et puis le charme de sa personne lui troublait le coeur plus que les sens. C'était une béatitude indéfinie, un tel enivrement, qu'il en oubliait jusqu'à la possibilité d'un bonheur absolu. (341)

パリ郊外のオトゥイユは彼の大切な愛を守るのに相応しい人里離れた空間である。だが彼らの愛をより美しくし，フレデリックをより恍惚とさせたのは，二人だけの空間にいながら皮肉にも《お互いに決して最後の一線は越えない》（ils ne devaient pas s'appartenir）という暗黙の了解であった。愛する女性を完全に我が物とすること以上に愛の確証が《相手を完全に所有する前味》の如く彼を魅惑し，絶対的な幸福の可能性さえも忘れさせるのである。理想の愛を追い求める者にとって全ての未来が約束された潜在的な所有の状態（la possession virtuelle）こそがもっとも幸福に近づいた時といえるのではないだろうか。

しかし，伯父の遺産を受けてエゴイスティックな決意をしたり，オトゥイユでの束の間の幸せののち愛するが故にアルヌー夫人を憎み始めた時，フレデリックの女性に対する感覚は変化し始める。革命のためポワソニエール通りへ移り住まねばならなくなったロザネットの部屋に必要な物を揃えてやることでフレデリックは《自分だけの家，自分だけの女》をようやく獲得した新郎のような喜びを味わうのである。

> Frédéric avait contribué largement à ces acquisitions; il éprouvait la joie d'un nouveau marié qui possède enfin une maison à lui, une femme à lui; (384)

だがこの時《女》より《家》が先行していることに注目すべきであろう。もはや彼にとって愛する女性の獲得だけが問題ではなくなり始めているのである。この傾向は三人目の女性ダンブルーズ夫人との関係においては一層顕著である。六月事変ののち訪れたダンブルーズ家では夫人を陥落させるまでもなくそこは既にフレデリックの所有地であるかの如く感じられるからだ。

> Il se rappelait l'autre soirée, celle dont il était sorti, le coeur plein d'humiliations; et il respirait largement; il se sentait dans

son vrai milieu, presque dans son domaine, comme si tout cela, y compris l'hôtel Dambreuse, lui avait appartenu. (423)

政治的お喋りや御馳走に徳性が麻痺したフレデリックにとってブルジョワの敬意を集める事が目下の課題となり，愛人にしたダンブルーズ夫人はこの社会を生きるうえでの踏み台《marche-pied》でしかなくなっている。それどころかダンブルーズ氏が亡くなった時フレデリックが喜ぶのは，これから彼のものになる夫人ではなく彼女の財産なのである。(Frédéric fit ainsi la récapitulation de sa fortune; et elle allait, pourtant, lui appartenir!) またサロン流行の煽りをうけてロザネットの部屋にかつての愛人たちが足繁く通っても，かつてのように憤慨するどころか，家の内部を飾ったり家具を新調したりして主人 maître たる威厳を保とうと必死である。だが果たして彼は女たちの主人になりえたのか。

— 《Nous faisons bien comme cela, tous les deux côte à côte! Ah pauvre amour, je te mangerais!》
Il était maintenant sa chose, sa propriété. (430)

ロザネットと平穏な生活を営み始めたかのようにみえたフレデリックは，いつの間にか逆にロザネットの所有物 (sa propriété) に成り下がっている。それはまたダンブルーズ夫人にとっても同様である。夫人は片時も自分のことを忘れないように (pour qu'il n'eût pas une action indépendante de son souvenir) 葉巻ケースや文具など日常のこまごました物に至るまでフレデリックに贈り，支配欲から (Par esprit de domination) 日曜礼拝にまで彼にお供をさせるのである。

こうしてフレデリックは愛する女性たちの主人 maître/propriétaire たらんと欲するのだが，その一種屈折した所有欲に振り回され，逆にロザネットとダンブルーズ夫人の私物 propriété となってしまい自由を奪われてゆくのである。彼を衝き動かすのは情念や肉欲の根底にある所有欲なので

あり，錯綜したこの感情の呪縛から逃れるには彼が所有したと信じ込んでいた女性たちを捨てるしか道はない。だからこそ彼女たちを捨てた時，彼は自由を取り戻したという喜びを覚えるのであり，彼が失意の中に見出すのは極端なエゴイスムなのである。理想として求める女性も所有したそのときから現実と対面し折り合いをつけねばならないにもかかわらず，フレデリックは常にどこまで所有できるかという次元に止まり，逆に所有化されることは拒み続ける。そしてこの無為ともいえる性向は，P.ブリュデューが指摘したように，まさに作者フローベールのそれに通ずる不確定性なのである。[5] フレデリックと女性たちとの幸福がオトゥイユやフォンテーヌブローなど彼にとってのレアリテ＝パリの外でのみ可能となるのもそれを象徴しているのではないだろうか。だからこそアルヌー夫人の最後の訪問の時でさえ二人の会話[6]は前未来や条件法過去の非現実の領域にとどまっている。

— 《N'importe, nous nous serons bien aimés.》
— 《Sans nous appartenir, pourtant!》
— 《Cela vaut peut-être mieux》, reprit-elle.
— 《Non!non! Quel bonheur nous aurions eu!》(502)

彼らの会話が常に現在を迂回しているのは，現実に対峙できず潜在的所有においてのみアルヌー夫人との愛を理想にとどめんとするフレデリックの弱さの裏返しなのである。

『社会における所有欲と憎しみ』

さて，フレデリックを取り巻く社会においてこの時期まさに所有権の問題が取上げられたのであれば，闘争をめぐる人々の欲望と感情を再検討する必要があろう。トクヴィルが『回想録』の中で示したように，あらゆる特権を廃止したフランス革命はあと一つ所有権の問題を残しており，[7] 闘争は「持てる者」と「持たざる者」との間に起こっていた。フレデリックの

友人デロリエは，この両者にもう一つ自分の属する階級を付け加えて権力崇拝を非難する。

—《En résumé, je vois trois partis..., non! trois groupes, —et dont aucun ne m'intéresse: ceux qui ont, ceux qui n'ont plus, et ceux qui tâchent d'avoir. Mais tous s'accordent dans l'idolâtrie imbécile de l'Autorité!(...) (237)

こうした「持てる者」と「持たざる者」の間に起こる憎しみは何も所有権に限ったことではない。R.ジラールが対象・主体・嫉妬の対象の関係を《欲望の三角関係》[8]と名付けたように，所有欲の多くは欲望の対象物を所有している者への憎悪や反感となって現れるのである。その典型的な例は，フレデリックと友人デロリエの関係であろう。若さ故に見なくてすんだ「持てる者」/「持たざる者」という彼らの力関係は，二人がパリに上京しフレデリックが伯父の遺産を相続してから次第に顕著になるが15000フランの融資を断られた時デロリエの怒りは爆発する。

Son amitié pour Frédéric était morte, et il en éprouvait de la joie; c'était une compensation! Une haine l'envahit contre les riches. Il pencha vers les opinions de Sénécal et se promettait de les servir. (246)

怒髪天を衝くデロリエは断られた本当の理由を尋ねるどころか，フレデリックへの友情も終わったと決めつける。ここで忘れてならないのはデロリエのフレデリックへの憎悪は次第に拡大してついにはフレデリックの属する「持てる者」への憎悪へとすりかわってしまうことである。憎悪は個のレベルから集団のそれへと容易に矛先を変えてしまう。その逆の現象が娼婦ロザネットとヴァトナ嬢との間に見られるだろう。口論の末，愛人デルマールからロザネットに贈られた金の羊の飾りを引っ掛けてしまったヴァ

トナとロザネットとの間では階級間の争いが個人の口論となりはて，社会主義よりも彼女らにとってもっと重要なライバル意識がむき出しになるのである。

《maintenant, je connais tes opinions politiques.》
— 《Quoi?》 reprit la Vatnaz, devenue rouge comme une vierge.
— 《Oh!oh! tu me comprends!》
Frédéric ne comprenait pas. Entre elles, évidemment, il était survenu quelque chose de plus capital et de plus intime que le socialisme. (383)

「持てる者」への憎しみはまた非生産的な執着となって，しばしば所有者を自分たちと同じレベルに引きずり下ろしたいという欲望に変容する。それは法の前では『平等』の楯を掲げて「私有権を廃止せよ」という要求となる一方で，個の次元では嫉妬や反感となって，ロザネットを徹底してたたきのめしたいというヴァトナの不可解な復讐心になったり，フレデリックの投資を思い止まらせて自分との差異を縮めようとするデロリエの道義心となる。

enfin, Deslauriers le détourna de l'entreprise. A force de haine, il devenait vertueux; et puis il aimait mieux Frédéric dans la médiocrité. De cette manière, il restait son égal, et en communion plus intime avec lui. (335)

このような数々のにくしみが渦巻く中で二月革命は現実となるのだが，勝利の喜びはいつの間にか人々を限り無い略奪と破壊へと導いてゆく。

et le peuple, moins par vengeance que pour affirmer sa possession, brisa, lacéra les glaces et les rideaux, lustres, les flam-

beaux,(...) (360)

彼らをこうした行為に駆り立てるのは王政を打倒するのに必要であった復讐の感情ではもはやなく，彼らの占領つまり獲得を確認するためだったことを見逃してはならない。フレデリックが《人々は素晴らしい》と感じたのも束の間，こうして「持たざる者」が「持てる者」を意識した時から彼らの理想の共和国は静かに内側から崩壊し始めるのである。なぜなら王政を倒した人々が三色旗の下に整列してももはや彼らの目的は一点へ収斂せず，《三色のうち，自分の階級の色しか見ない》彼らはおりあらば他の階級を倒そうと目論でいるからだ。そして野次馬根性で家の外に出る者たちのだらしない身なりだけが，かろうじて階級の相違を隠蔽しているのである。

Le négligé des costumes atténuait la différence des rangs sociaux, la haine se cachait, les espérances s'étalaient, la foule était pleine de douceur. (364)

所有権は《宗教と同じぐらい崇められ，神と混同され》，ブルジョワと《所有とは盗みだ！》と糾弾する労働者との確執は激化する。誰もが自らの悲惨に終わりを告げようとし，職業団体は各々の利害を求めて市役所へ殺到することになる。

Le spectacle le plus fréquent était celui des députations de n'importe quoi, allant réclamer quelque chose à l'hôtel de ville, —car chaque métier, chaque industrie attendait du Gouvernement la fin radicale de sa misère. (365)

六月事変に至るまで各地で開かれる政治クラブはその最たるものだろう。フレデリックが垣間見た《知性クラブ》だけでも，僧侶は神の国を，役者

のデルマールは演劇の改革を，画家ベルランは芸術の候補者をと，皆自分に都合のよい社会にしようと現実からかけ離れたことを口々に要求し実際には何の解決にもなっていないのである。民衆の味方であったデロリエでさえ，あらゆる党派から見放され《48年の革命以来どの職業団体も自分の利益しか考えていないのだ》(Ils demandaient même des représentants du peuple à eux, lequels n'auraient parlé que pour eux!) と労働者たちを非難するのである。

こうして一見成功したかにみえた1848年の革命では，勝者間で権力を共有することが出来ず闘争の次元が階級間の争いから職業間のそれへ，そして個人の次元へと地滑り的に明らかになってゆくだけで，本質的には何も変わってはいないのである。平等と自由にみちあふれた理想的共和国を求めて専制者を倒したにもかかわらず内部崩壊していく社会を描きながらフローベールが告発しているのは，このような社会の根底に潜む個人個人の利害とエゴイスム[9]ではないだろうか。友人デュサルディエやロザネットも言ったように，嘆かわしいことには，人民は一旦専制を打倒すると現実に直面して共和国を築く努力もせず，ただこの混乱を収拾すべき指導者がいないという意識のみが広がってゆくのである。というのも彼らは自らが所有者になっても自らが獲得したものから逆に拘束されていくという所有化 appropriation の過程に気付かぬまま，理想と理実を折り合わせようとしないのである。従って，全てが可能と見えている時が一番幸福であったかにみえる。恋愛においても現実を回避せざるを得なかったフレデリックがデロリエと「あの頃が一番良かった」(C'est là ce que nou avons eu de meilleur!) と最後に呟くのは作品中に蔓延するこの無為で非生産的な情念 (passion inactive) の表出なのではないだろうか。

『時代精神における所有と平等』

1857年10月 *L'Artiste* 誌に掲載されたボードレールの『ボヴァリー夫人論』が作者フローベールを非常に喜ばせたことはつとに有名だが，その中に彼らの生きていた年代について次のような興味ぶかい件りがみられる。

Les dernières années de Louis-Philippe avaient vu les dernières explosions d'un esprit encore excitable par les jeux de l'imagination; mais le nouveau romancier se trouvait en face d'une société absolument usée, —pire qu'usée,— abrutie et goulue, n'ayant horreur que de la fiction, et d'amour que pour la possession.[10)]

フローベールと同時代人でもあるこの詩人は，数年前から人々の精神的なものへの関心が薄れていることを指摘し，フローベールが，Louis-Philippe以降《徹底的に疲弊しつくした畜生化した貪欲な社会，虚構を忌み嫌い所有のみを愛する社会に直面していたのだ》（下線論者）というのである。これこそまさに48年の革命時に青年期を送ったフローベールたち，ひいては『感情教育』の主人公フレデリックが生きていた社会ではなかったか。このことはまさに自分の利害ばかりに終始する社会傾向を嘆くフローベールの次の言葉と重なるであろう。

Je trouve que l'homme maintenant est plus fanatique que jamais, mais de lui. (...)il ne trouve rien de plus grand que cette misère même de la vie dont elle tâche sans cesse de se dégager. Ainsi la France, depuis 1830, délire d'un réalisme idiot;[11)]

「人はかつてないほど自分のことに熱狂的になっている。そして絶えず逃れようとする生活の悲惨さほど彼らの関心をひくものはない。1830年以来フランスは馬鹿げた現実主義にのぼせているのです。」この精神性を失い所有のみを愛する社会が1830～60年代の産業主義の影響を受けていることは否めない。ナポレオンⅢ世治下の急速な経済的膨張に対し，フローベールは憤慨する。なぜなら新しく安い大量生産の物品の氾濫は，精神を腐敗させ交換価値という概念を広めるのに加担するからだ。

Gueulons donc contre les gants de bourre de soie, contre les fauteuils de bureau, contre le mackintosh, contre les caléfacteurs économiques, contre les fausses étoffes, contre le faux luxe, contre le faux orgueil! L'industrialisme a développé le laid dans des proportions gigantesques![12]

フローベールが大量生産の安価な物品による為の奢侈だけでなく，これらの生み出す偽の慢心にまで憤激するのは，所有への熱狂が精神面にまで及ぼす弊害にいち早く気付いていたからにほかならない。こうした欲望が渦巻く社会で平等を求めようとすれば，友人デロリエがフレデリックの繁栄を阻むことで自分との平等を図ったように，自分より上位の者を引きずり落とし共通の凡庸さ（médiocrité）に甘んじるしかない。

89 a démoli la royauté et la noblesse, 48 la bourgeoisie et 51 le peuple. Il n'y a plus rien, qu'une tourbe canaille et imbécile. Nous sommes tous enfoncés au même niveau dans une médiocrité commune. L'égalité sociale a passé dans l'esprit.[13]

89年に始まった大革命の延長線上では階級間の格差をなくしたところまではよかったが，その《社会的平等は精神にまで入り込んでしまい》，《精神的な優位性まで否定した》為に《平等とはあらゆる自由の否定なのだ》(Qu'est-ce donc que l'Egalité si ce n'est pas la négation de toute liberté ?）とフローベールは告発する。平等と自由を理想として掲げた共和制がもろくも流産した根底には，所有あるいは所有権が孕む問題の難しさがあり，フローベールもそのことを意識していたのではないだろうか。

『感情教育』のテクストに組み入れる資料として社会主義作家を系統的に読破していたフローベールはプルードンの『所有とは何か』（*Qu'est-ce que la propriété?*）について読書ノートを作成するなかで，「propriétéという語にみられる諸概念の混同」という項目を余白に記入しプルードンの

言説を以下の如く引用している。

> à l'origine des sociétés《tout ce que l'homme put appeler *mien* fut dans son esprit identifié à sa personne; il le considéra comme sa propriété, son bien, une partie de [sa person] 〈lui-même〉, un membre de son corps, une faculté de son âme. *La possession des choses fut assimilée à la propriété* des avantages du corps et de l'esprit》[14]

プルードンはその件りで社会の起源から，所有は単に物質面にとどまらず精神面に及ぶものであると述べているが，フローベールはこれを書き写しながら《物の所有は肉体と精神の専有になぞらえられた》という部分を強調している。この読書ノートがしばしば社会主義への批判の場となっていることは小倉孝誠氏の研究で既に明らかだが，フローベールが「『感情教育』において構築するであろう主題論的構造を念頭に置きながら読書に着手した」[15]のであれば，確かに所有の問題はフローベールの関心をひいていたのではないだろうか。またプルードンの著作を読破したように見えながら実際にフローベールが参照したのはこの他に1848年に出た小冊子『所有者への警告』，『労働権と所有権』など全般的思想を知るための基本書ではなかったことも，彼の所有への常ならぬ関心を裏付けているのではないだろうか。

その意味ではフローベールが1864年7月末頃に《鍛え直されます》[16]と言っては読んでいたサド侯爵の『閨房哲学』後半部は彼が所有の問題に取り組んだ態度を多少なりとも補足してくれるだろう。というのも『感情教育』の下書き brouillon が実際に書き始められたのは1864年9月1日であるが，A. レットや松沢和宏氏が作品の萌芽は1862年であると判定するように[17]，翌63年フローベールは他作品との間で逡巡しながらも1864年には『感情教育』一本に絞っているからである。つまり『感情教育』の資料収集のため64年の夏に社会主義についての著作を読破していた頃には下書き

brouillon に取りかかる以前の筋書き scénario の推敲はかなり進んでいたことになる。まさにこの時期フローベールは『閨房哲学』を読んでいたわけだが，1795年初版のこの本の後半部の抜粋が1848年の革命当時政治パンフレットとして出回った[18]ことからも，作品中の政治論議が二つの革命に通ずるものであったことが窺えるだろう。そしてこの後半部においては所有権尊重の誓約が持つ矛盾もまた論じられているのである。—この作品は精神・感性及び内面における個としての絶対的自由を実践し獲得するためにリベルタンたちが良家の子女ウージェニーを再教育するという戯曲形式になっている。肉体の解放のための教育を終えたリベルタンたちは次に精神の解放のための教育を始めるのだが，その大部分が作品後半部の『フランス人諸君！　共和主義者たらんとせば今一息だ』というミルヴェル騎士の朗読になっている。そこでは所有と平等の兼ね合いが極端に押し進められ，契約自体の不平等さゆえに「持たざる者」の盗みが正当化されたり，あるいは自由な人間に対する所有行為を全面的に禁止するために一夫一婦制の廃止までもが唱えられる。一見過激すぎるサドのこの意見も次の件りを読めば個の絶対的自由を求めるが故に到達したユートピア論ということがわかるだろう。

> et jamais l'un de ces sexes ou l'une de ces classes ne peut posséder l'autre arbitrairement.[19]

「一つの性または一つの階級が任意に他の性または他の階級を所有することはできない。」という この言説は 所有の問題では性も階級も等しく扱わねば真の平等も真に公平な所有もあり得ないというサドの真摯な態度の現れであろう。思想形成と創作の模範としてサドの著作を絶えず愛読し続けたフローベールもまた，この所有の問題に恋愛や階級という次元を越えて取り組んだ一人であった。『感情教育』の中で所有や私有物という語彙が，階級闘争のテーマとしても男女間でもしばしば用いられているのは，単に時代的背景によるのみならずフローベール自身所有と平等の問題の持つ矛

盾に気付き，恋愛という個の次元と革命の起こる社会の次元を切り離していなかったからではないだろうか。

サドに賛同し悪徳の書の面白さを述べている『作業手帳』2の中で，フローベールのこの文学的世界観は一層強調されているように見受けられる。

〈x〉〈O〉 La Poésie ne sort pas du *monde organique*, quoi qu'〈on〉 en dise (la [〈Aussi〉]) (littérature industrielle, utilitaire, humanitaire 〈est sans beauté et sans entrailles〉 etc.) il lui faut une base sensible et une surface plastique.

En ce sens, rien de plus poétique que le vice et le crime: [Voilà pourquoi] 〈aussi〉 les livres vertueux sont〈-ils〉 [si] ennuyeux et [si] faux ils méconnaissent [l'homme et le fond éternel de l'homme] la vie [individuelle] [〈particulière〉] [〈individuelle〉] [sans frein] le moi rejaillissant contre tous, [l'individu] 〈l'homme〉 contre la société 〈ou en dehors d'elle, qui est le vrai homme organique.〉.

《ポエジーは有機的世界から生じるのではない。……それには感覚的基盤と可塑的表層が必要である。》[20]。フローベールはここで美徳の書の退屈さが《全てに波及し〔止まることのない〕自己》，《真の有機的人間である社会に対峙する人間》を認めないことから起こると書き残し，個人を表すのに執拗なほど「individuel」と「homme」という語の間で揺れ動いている。

資本主義と一夫一婦制によるブルジョワ社会の矛盾が明るみにでたのが1848年の革命であり，その根底に潜んでいたのは「所有」の問題であったが，この時代精神を描くのに個の次元での恋愛や権利に対する所有欲のドラマを忘れていないのは，作者自身が「社会をオルガナイズしているのは人間であり，homme organique がいるからこそ le monde organique が成り立つ」という文学創造の基本精神を抱き続けたからなのである。

註

1) 『感情教育』における物語と歴史の二文脈の関連については，両者の間に「詩的照応」があることを示したジャック・プルーストの論文（《Structure et sens de *L'Education Sentimentale*》, *Revue des sciences humaines*, janv.-mars, 1967）や1840年代においては感情と政治の歴史的構造が同一であったというミッシェル・クルゼの分析（《Passion et politique dans *L'Education Sentimentale*》, in *Flaubert, la femme, la ville*, Presse Universitaires de France, 1982）など，以下の研究がある。J.-P. Duquette, *Flaubert ou L'Architecture du vide*, Les Presses de l'Universitié de Montréal, 1972; J.-F. Tétu, 《Désir et révolution dans *L'Education Sentimentale*》, Littérature, 《*Modernité de Flaubert*》, oct. 1974; Victor Brombert, 《Articulations et polyvalence》, in *Production du sens chez Flaubert*, Union générale d'éditions, coll. "10/18", 1975. 二文脈に共通する失敗が同世代にあっては言葉の氾濫と空回りによって促されている点については以下の拙稿を参照されたい。「『感情教育』における恋愛と政治」，『芸文研究』第五十九号，1991年，pp. 18-37。

2) *Correspondance*, cinquième série, in *Œuvres complètes de Gustave Flaubert*, Edition Conard, p. 158, 10月6日の書簡。《Je veux faire l'histoire morale des hommes de ma génération; 《sentimentale》 serait plus vrai. C'est un livre d'amour, de passion; mais de passion telle qu'elle peut exister maintenant, c'est-à-dire inactive.》

3) *Ibid.*, p. 215, 5月19日あるいは29日の書簡。

4) Gustave Flaubert, *L'Education Sentimentale*, ed. C. Gothot-Mersch, Flammarion, 1985. 以下本書からの引用は本文中にページ数を示す。

5) 物質的・文化的・象徴的資産と生物学的個人との相互所有化の関係という観点からみると，社会的存在たるべき地位と結婚を拒否するフレデリックは自分の所有物を断念せず，かといってそれによって所有されるがままにはならない所有者なのだとP. ブルデューは指摘する。《L'invention de la vie d'artiste》, in *Actes de la recherche en sciences sociales*, 2, 1975, pp. 70-71.

6) 生成論の観点からアルヌー夫人の最後の訪問に関して金銭問題の存在を指摘した松沢和宏氏は，この二つの時制によって二人の恋愛が《過去においても未来においても「可能」なものですらない》と述べている。「『感情教育』草稿の生成論的読解の試み」，『文学』，n° 56, 岩波書店 1988年12月号，pp. 61-62.

7) Alexis de Tocqueville, *Souvenirs*, *Œuvres complètes*, t. XII, Gallimard, 1964, pp. 36-37. 《...Bientôt, ce sera entre ceux qui possèdent et ceux qui ne possèdent pas que s'établira la lutte politique; le grand champ de bataille sera la propriété,[...]》

8) René Girard, *Mensonge romantique et vérité romanesque*, Editions Bernard Grasset, 1961, pp. 24-28.

9) フレデリックのエゴイスムについてはミッシェル・クルゼも言及するところである。*Op. cit.*, p. 70.

10) Charles Baudelaire, *Œuvres complètes* II, Pléiade, Gallimard, 1976, p. 79. 1857年10月18日の記事は次の見出しで掲載された。《M. Gustave Flaubert. Madame Bovary —La Tentation de Saint Antoine》

11) 1852年5月15日あるいは16日付のルイーズ・コレ宛の書簡。*Corr.*, deuxième série, p. 414.

12) 1854年1月29日付ルイーズ・コレ宛の書簡。*Corr.*, quatrième série, p. 20. また，ジャンヌ・ベムは1830—60年の経済拡張とフランスにおける産業革命の影響に言及して，社会的人間関係が物質の関係や利潤とみなされたと述べている。 Jeanne Bem, 《Sur le sens d'un discours circulaire》, *Littérature* n° 15, 《Modernité de Flaubert》, p. 108, 1974. 一方 A. O. ハーシュマンは，新種の消費財がより幅広く普及するような経済的拡大の時代にこそ物質文化への敵意が表面化すると指摘し，19世紀フランスの歴史的証拠の一つとしてフローベールの同書簡を挙げている。 Albert O. Hirschman, *Shifting involvements —Private interest and public action*, Princeton University Press, 1979, p. 53.

13) 1853年9月ルイーズコレ宛の書簡。*Corr.*, troisième série, p. 349.

14) プルードン著『所有とは何か』の読書ノートに関しては小倉孝誠氏が発表した文献を参照のこと。余白には《Confusion d'idées dans le mot propriété》という見出しがある。[...] は削除 〈...〉 は加筆されたことを表す。mien はプルードンの強調を示す。《Note de lecture de Flaubert sur *Qu'est-ce que la propriété?*: Proudhon jugé par Flaubert》, *Equinoxe*, n° 1, Rinsen-Books, 1987, p. 112.

15) 小倉孝誠『フローベールにおける知の生成と変貌—『感情教育』と社会的言説—』, 『文学』n° 56, 岩波書店, 1988年12月号, p. 84 以下のフローベールが読破したプルードンの著作に関しては小倉氏が同論文で明らかにしている。

16) 1864年7月末—8月始のジュール・デュプラン宛の書簡。 *Corr.*, cinquième série, p. 150. 《Je me suis retrempé hier au soir, *au débotté* comme dit Villemessant, en relisant le deuxième volume de *La Philosophie*, et toujours avec un nouveau plaisir.》(強調はフローベール)

17) 作品の起稿殊に下書き brouillon や筋書き scénario の段階の年代判定は極めて微妙な問題であり以下の諸説がある。A. レットによると作品の萌芽は1862年2月頃であり同年12月12日には小説第I部に関するノートが取られるが，いくつかのテーマの中で実際に『感情教育』が選ばれたのは1864年1月である。

(Alain Raitt, l'introduction de *L'Education Sentimentale*, Lettres Françaises, l'Imprimerie nationale, 1979, pp.20-25) P.M.ウェザリルは1862年3月と翌63年2月11日にフローベールがゴンクール兄弟に作品計画について語っていることに言及し63年3月末からの書簡を詳細に取り上げている。(P.M.Wetherill, 《Flaubert et la Genèse de *L'Education sentimentale*》, *L'Education sentimentale —Image et documents*, Classique Garnier, p.13) また松沢和宏氏の見解では1962年12月15日までにはデュリー夫人によって刊行されたCarnet 19のMme Moreauの筋書き scénarioは書き上げられており，1863年4月頃には初期の scénariosは着手されていた。(*Introduction à l'étude critique et génétique des manuscrits de 《l'Education sentimentale》 de Gustave Flaubert*, France Tosho, 1992.)

18) *A l'immortalité. Français encore un effort si vous voulez être républicains et libres de vos opinions.* L'an LVI (1848) de la R.F. au chef-lieu du Globe. In-8. 16p. この資料を探すにあたり適切な助言を下さった宮本陽子氏に深い感謝の念を表したい。

19) *La Philosophie dans le boudoir*, *Œuvres complètes* du Marquis de Sade, Au cercle du livre précieux, p.502.

20) Gustave Flaubert, *Carnets de travail*, Edition critique et génétique établie par P.-Marc de Biasi, p.214. [...] は削除, 〈...〉は加筆, [〈...〉] は加筆の後削除されたもの。ド・ビアジ氏はこのページが書かれたのは1860年の1月から2月と推定する。